

平成30年度 自己評価表

鳥取県立皆生養護学校皆浜分校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>学び 輝き 感動のある学校 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、よりよく生きることができるようにする学校 《 18歳で自立できる人を育てる ～将来を見とおした今のQOLの向上～ 》</p>	<p>今年度の重点目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 幼児・児童・生徒一人一人が「いきいきと学ぶ」教育に努める。 2 保護者の願いや地域の期待に応える。 3 幼児・児童・生徒の健康と安全を守る。 4 センターの機能を推進する。 5 開かれた学校を推進する。
---------------------------	---	-----------------	---

年 度 当 初					評 価 結 果 (2) 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度の改善方策
一人一人が「いきいきと学ぶ」教育の充実	小学部 個に応じた支援や教育の充実	○児童の状態に応じた学習や活動への参加の仕方について、提案・交渉を重ね、次第に児童の登校が安定してきた。さらに、安心して学習や活動に取り組めるようにするため、効果的な支援のあり方について、保護者や教職員間の連携を深める必要がある。 ○一人学級における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、授業改善に取り組んでいく必要がある。	○主体的・対話的で深い学びに向けた授業実践の積み重ねを通して、児童が積極的に学習や行事に参加したり、本校の児童との交流に複数回取り組んだりすることができる。	○児童が抱える不安を早期に把握し、学習や活動への参加の仕方について提案・交渉して不安の軽減を図る。また、送迎時等における保護者との会話や、教職員間での情報交換を密に行う。 ○児童自らが考えることを大切にする授業に取り組み、本校の児童との交流を通して、同世代とのコミュニケーション力の向上を図る。	○保護者や校内での情報共有を確実にし、児童の状態に応じた支援を行うことで、登校が安定し、様々な活動に安心して伸び伸びと取り組むことができた。 ○他者とかかわりながら思考力や表現力を育てる学習の展開を工夫した。協同的な学習の楽しさを味わい、積極的に学習に取り組むことができた。 ○本校の児童との交流を通して、コミュニケーション能力が高まった。同時に、相互理解を促すよい機会となった。	A	○安定した登校が継続するように、不安軽減のために有効であった支援について再度検討し、学校生活や学習に生かす。 ○中学部生徒や複数の教職員とかかわりながら学習する場面を計画的に設定する。 ○本校児童との交流を継続し、障がいについて自己理解と相互理解が深まるように交流の仕方を工夫する。
	中学部 心の安定と意欲を高める支援の充実	○生徒、保護者が本人の病状や学習の状況を理解し、進路決定に向けて学校生活を充実させていくことが必要である。	○個々の生徒の授業への出席率が上がり、安心して学校生活を送ることで、自分の進路についての展望が持てるようになっている。	○本人、保護者、教職員が生徒の病気や学習状況を共有し、情報交換しながら個に応じた学習指導や進路指導に努める。	○生徒に寄り添いながら心の安定を図り、行事や様々な取り組みの中で自分にできることを増やし、自信につなげて85パーセント以上の生徒の授業への出席率が上がった。 ○保護者や校内での情報共有を密にし教育相談等を通して自分の課題を意識させ、克服に向けての段階的に支援をすることができた。 ○苦手なことに対して、気持ちに折り合いをつけ自分に合った方法で取り組むことが不十分である。	B	○これまでの心の安定と意欲を高める取り組みで有効であった支援について再検討し、次年度に生かす。 ○本校生徒との交流を計画し、同世代でのコミュニケーション力の向上や相互理解を図る。
ニーズに対応できる専門性の向上	研究部 主体的・対話的で深い学びを育む授業づくり	○授業研は子どもに負担のない形で公開し、授業研究を深めることができた。 ○学習や行事を通してかかわる力を養い、自己肯定感が育ってきている。 ○学校生活に大きな抵抗感をもつ子どもに対しての方策を研究していく必要がある。	○学習指導要領の視点から、学習の目標を立てたり、「主体的・対話的で深い学び」を育てる授業を検討したりする校内研究が行われている。	○主体的・対話的で深い学びなるように、授業中の子どもの姿や授業の工夫・支援についての実践を整理・分析する。 ○本校で行われる授業改善や子どもたちとの接し方についての研修会に継続的に参加する。	○分校や本校において理論研究を行った上で、個に応じた支援になるよう工夫しながら授業を行うことができた。その反面、効果の出にくい場面が見られることもあった。 ○電子黒板・プレゼンテーションソフトの使い方の研鑽に努めた。いろいろな形で学習に活用することができ、外部からのサポート体制もあり、現場での効果が高まった。	B	○理論研究・ICT研修を維持しつつ、児童・生徒が自分の思いを安心して語ることができるような「主体的・対話的で深い学び」につなげていくことが必要である。
	支援部 実態に応じた指導・支援につながる研修と教育相談の充実	○病状により、対人関係に不安があったり、集団生活に緊張を抱いていたりする児童生徒が多い。今年度、教職員の半数が入れ替わっていることから、病気を正しく理解し、学校生活における不安や緊張の軽減につながる支援ができる専門性が不可欠である。また、保護者の子育てに対する支援が必要なケースもあり、児童生徒の将来の自立を考えた支援のあり方を検討する必要がある。	○正しい病気の理解に基づき、個に応じた適切な教育相談が日常的になされ、児童生徒や保護者へのアンケートも満足度が高くなっている。	○病気に関する基礎的・基本的な内容の研修を、合同カンファレンスの際に実施する。また、医療機関やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等との連携を図り、適切な支援のあり方について検討する。 ○教育相談計画の提案や、教育相談についての研修会を通して、教育相談の意味や重要性について共通理解を図り、教職員一人一人の意識を高めるようにする。	○病識や教育相談の研修を通して、病気や障がいに対する正しい理解や適切な支援のあり方について共通認識でき、指導・支援に生かすことができた。 ○児童生徒、保護者との信頼関係の構築に努めてきた。アンケートでの満足度も高く、親子共に、安心して学校生活を送っている。 ○本校、医療機関、SC、外部関係機関と連携し、児童生徒への指導・支援のあり方を検討してきた。さらに、児童生徒の将来を見据えた進路指導の充実を図る必要がある。	B	○障がいの特性の理解や指導法について、研修や実践交流を通して専門性を高める。 ○本校、医療、福祉、スクールカウンセラー等との連携による継続的な支援を行い、将来を見据えた進路指導の改善・充実を図る。
健康校と生活安全にお確ける	健康安全部 心身ともに良好で、登校し学習できる環境づくり	○心の問題が体に表れるので健康観察を丁寧に実施し、その日の児童生徒の心身の状況を把握する必要がある。	○児童生徒の心身の状況を把握することで無理のない形で授業に参加することができ、出席率等が向上する。	○朝の健康観察の他にも常時心身の状況を把握し、情報を共有して支援に努める。 ○自分の心身の状況を訴えることができるように支援する。	○夏休み明けから調子を崩した生徒がいるが、細やかな健康観察や情報収集、保護者との連携を通して長期欠席になることなく3学期には調子を取り戻した生徒が多い。 ○職員間の情報共有と外部機関との連携がとれ、支援につながることができている。	B	○個々のペースで登校ができており、それを崩さず安定するように、さらに心身の状況を把握し、個々にあった支援で学校に向かえるようにしていく。 ○情報共有と外部機関との連携をさらに活用し、有効な支援を探っていく。 ○安心して学校で過ごせるように、自分の心身の状況を伝え、共に考え、解決できるよう支援していく。

評価基準 A: 十分達成 [100~80%] B: 概ね達成 [80~60%程度] C: 変化の兆し [60~40%程度] D: まだ不十分 [40~30%程度] E: 目標・方策の見直し [30%以下]